平成17年度　厚岸湖・別寒辺牛湿原学術奨励補助研究報告書概要
厚岸湖・別寒辺牛湿原における爬虫類相の調査

弘前大学大学院農学生命科学研究科生物機能科学専攻　　片山　亮

厚岸町にはトカゲやヘビが生息しているのだろうか？　調査を行う前に住民の方々に聞き込みを行ったところ、「良く見る」と言う人や、「何十年も見ていない」と言う人まで様々で、その種類も、釧路湿原や中標津町では「シマヘビが多い」と言われているのに、厚岸の人々は「アオダイショウがほとんどだ」と言っていた。厚岸には本当は何が生息しているのだろうか？

この疑問を解決するために、2005年6月下旬～7月中旬にかけて厚岸湖・別寒辺牛湿原周辺を中心にトカゲやヘビを探した。その結果、トカゲを一匹と、20匹のヘビと3匹分のヘビの脱皮殻を見つけることができた。トカゲはニホンカナヘビであったが、残念ながら逃げられてしまい、詳しくは分からなかった。

捕まえたヘビは全てシマヘビで、面白いことに住民の目撃情報とは全く違っていた。これはどうしてだろうか？　シマヘビはその名の通り、縦に4本の縞模様があることが一般的な特徴である。しかし厚岸町に生息していたシマヘビは、ほとんどこの縦縞がはっきりしておらず、見た目はアオダイショウにそっくりだったのである。実はシマヘビにはこのような色彩変異が多く見られ、北海道では縦縞がはっきりしていないシマヘビ（ムギワラ型シマヘビ）や、真っ黒になったシマヘビ（カラスヘビ）が多く見られることが知られていて、厚岸町ではこのムギワラ型シマヘビが特に多かったのだ。このように見た目は全然違うが、鱗の数やDNAなどを調べたところ、他の北海道産のシマヘビや本州のものと大きな違いが無かった。では、どうして厚岸町にはムギワラ型シマヘビがたくさん生息しているのだろうか？　これは今後さらに調査していかなければならない謎である。

捕まえたシマヘビの中には、ネズミの毛がぎっしり詰まった糞をした個体や、エゾサンショウウオを飲み込んでいた個体が見られた。これらのことから、この地域のシマヘビが両生類や小型の哺乳類を餌としていることが分かり、生態系の一員として重要な役割を持っていることも、今回の調査から確認することができた。